

■【ファシリテーター用資料】

事前にファシリテーター自身が各ケースについて考える際に参考にしてください。また、グループでの話し合いの状況に応じて紹介しましょう。

■ケース1

- Aさんが困っているのは明らかであり、落ち着いた生活がおびやかされていると言えます。ただ、話し合いの中では、障がいのあるBさんもまた現在の生活を維持することがおびやかされているところまで話し合いを深めましょう。
- 話し合いの中で、「壁や床に防音対策をほどこす」、「どちらかが引っ越す」などの意見が出てくることが予想されます。
- AさんがBさん側（Bさん、支援者）と出会っていない時は、「迷惑」「不安」といった感情が募^つっていることに注意しましょう。また、「障がいがある人だと文句を言いにくいのか？」という理不尽な思いも抱いています。
- Bさんと出会い、Bさんの人となりや暮らしぶりを知ることで、その行動がどうして起こるのかが分かれば、騒音自体はなくならなくても、Aさんの騒音に対する感覚（気になるかならないか、迷惑と感じるかどうか）は変化する可能性があります。

■ケース2

- Cさんは必要な情報を得られないことで疎外感を抱いています。また、安心して働き続けることにも不安を抱えています。
- 上司も困っている可能性があります。
- 話し合いの中では、Cさんにとって手話通訳がどれほど必要なのか、「機密事項を扱う会議だから」というのが通訳を頼まない理由として正当だと言えるのか、「筆談するから」という約束がかつて守られなかった点に注目してほしいと思います。
- 「社内で通訳ができる人を育てる」「音声を文字化する機械などを使う」「パソコンで要約筆記をする」などの具体的な情報保障の方法が話し合いの中から出てくることも予想されます。

■ケース3

- Dさん、子ども、先生、子どもの同級生、その保護者など、様々な人が様々に「困っている」可能性があります。
- Dさんは子どものことを理解してほしいと願っていますが、「自分が責められている」というストレスを強く感じています。子ども自身はどうしてほしいのか、先生はどう考えているか、周りの子どもはどう感じているか、このシートには詳しく書かれていませんが、想像して話し合ってみましょう。
- 話し合いの中で、Dさんのしんどい気持ちに寄り添いつつも、どうしたら孤立感を軽減できるのか、先生と十分話し合うこと、他の保護者の前で思いを話す場を作ることなど、できることを考えてみましょう。
- Dさんは先生から子どもの同級生に「障がいの特性」を説明してもらうことにこだわっていますが、それが答えになるとは限りません。先生は、何でも「障がいの特性」と結び付けることが逆にレッテルを貼ることになるのを恐れて、あえて説明をしていない可能性もあります。Dさんの子どもの行動の原因を探り、叩いてしまうなどの行為には現場で対処しながらも「障がいがあるからこうするのだ」と決め付けることなく、クラスの一人ひとりが「個性や違いを認め合う」ようになることをめざしているのかもしれない。